

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：84301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K16698

研究課題名（和文）思溪版大蔵経刊行実態の解明 - 目録と遺例による実証的研究 -

研究課題名（英文）A Bibliographical Survey of the later Sixiban dazangjing.

研究代表者

上杉 智英 (UESUGI, Tomofusa)

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部美術室・研究員

研究者番号：50551884

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は南宋時代に刊行された後思溪版大蔵経の目録と現存状況の乖離という齟齬に対し、現行流布本（大正新修大蔵経所収本）の祖本が台北国立故宮博物院蔵の南宋刊本であることを検証した上で、当該目録が南宋刊刻部分と後世の補写部分で構成されていること、問題となる増補経典51函24部450巻の記載箇所が補写部分に属することを確認し、それが南宋刊本『後思溪録』ではなく、慶安元年（1648）成立の『天海版目録』によるものであることを表記方法の特色より実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

思溪版大蔵経は元・明版大蔵経の底本として継承され、日本においても春日版の底本として受用される等、鎌倉時代以降の仏教・社会に多大な影響を与えるものである。その全体像を正しく把握・認識することは南宋社会における出版の実態、並びに当時の仏教社会におけるテキスト環境を明らかにするに止まらず、広く諸領域を資するものである。なお、本研究結果は従来の「天海版大蔵経の底本は後思溪版大蔵経である」との認識に再考を促すものである。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the Sixiban dazangjing 思溪版大蔵経 and their catalogues. I have explored the issue that the “24 canonical texts in 450 fascicles, in 51 chests” introduced in the Later-Sixi lu cannot be found in any extant versions of the Sixizang in Japan. In the first phase, I have clarified the fact that the copy text for the standard text of the Taisho edition was copied from the version preserved at the Taipei National Palace Museum. In the second phase, I have conducted a survey of the National Palace Museum version, and pointed out that this particular version consists of the parts printed in the Southern Song period, and the supplemented parts. In the final phase, I have investigated these supplemented parts, which incorporate the additional “24 canonical texts in 450 fascicles, in 51 chests”, and concluded that the National Palace Museum version has been composed on the basis of the Tenkaiban mokuroku, based on the ways in which descriptions are given.

研究分野：仏教文献学

キーワード：思溪版大蔵経 前思溪録 後思溪録 原本調査 台北故宮博物院蔵 中国国家図書館 楊守敬

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

思溪版大蔵経とは、北宋末から南宋初期にかけ、浙江湖州帰安県の圓覚禅院において王永従一族が発願し開版された一切経(仏典の一大集成)である。その後、圓覚禅院は荒廃、一切経の印造活動も停滞した。しかし淳祐年間(1241 - 52)に皇族らが檀越となり圓覚禅院は法宝資福寺に昇格、版木の再刻が行われた。圓覚禅院時代の一切経は「前思溪蔵」、法宝資福寺時代のものには「後思溪蔵」と呼称され、前思溪蔵の目録として『湖州思溪円覚禅院新彫大蔵経目録』(前思溪録)、後思溪蔵の目録として『安吉州思溪法宝資福禅寺大蔵経目録』(後思溪録)が現存している。

このように前・後思溪蔵はその印刷時期によって区別されるが、両蔵の具体的相違は如何なるものであろうか。従来、両目録の比較により、後思溪蔵は前思溪蔵 548 函に新たに 51 函 24 部 450 巻の仏典を追記したものと規定されている。

a. 『湖州思溪円覚禅院新彫大蔵経目録』(前思溪録) 548 函 5480 巻 収録

b. 『安吉州思溪法宝資福禅寺大蔵経目録』(後思溪録) 599 函 5930 巻 収録

なお、思溪版大蔵経の原本調査の結果としては、『長滝寺宋版一切経現存目録』(1967)、『喜多院宋版一切経目録』(1969)、『増上寺三大蔵経目録』(1981)、『豊山長谷寺拾遺 宋版一切経』(2011)が刊行されている。これらの内、喜多院、増上寺、長谷寺所蔵本は、淳祐年間(1241-52)の補刻を経た後思溪蔵にも拘わらず、『後思溪録』に記載される追加分 51 函 24 部 450 巻の現存は確認されていない。

申請者も実際に岩屋寺(愛知)所蔵の後思溪蔵の原本調査を実施している(2012年2回、2013年4回、2014年2回)。岩屋寺蔵本は高山寺(京都)旧蔵本であり、現存点数も多く、保存状態も良好であるにも拘わらず、後思溪蔵の特色とされる追加分 51 函 24 部 450 巻の現存は確認できず、『大正蔵』所収の目録と現存状況との乖離に疑問を持った。

何故、現存しているのは後思溪蔵であるにも拘わらず、その目録とされる『後思溪録』にみられる増補経典 51 函 24 部 450 巻を具備するものが皆無なのか。その原因は活字本『後思溪録』(大正蔵本)にあると推測される。本書は、『大正新脩大蔵経』別巻『昭和法宝総目録』(1934)に翻刻収録されている。ただし、『大正蔵本』には底本を始め書誌情報は一切記載されていない。それにも拘わらず従来、無批判に思溪版研究の一次資料として使用されている。李富華・何梅『漢文佛教大蔵経研究』(2003)は、増補経典 51 函 24 部 450 巻が慶安元年(1648)成立の『日本武州江戸東叡山寛永寺一切経新刊印行目録』(天海版目録)と一致することより、『天海版目録』に基づき増補された可能性の高いことを指摘している。ただし両者の合致は『天海版目録』(慶安元年 1648 成立)は『後思溪録』(南宋成立)を底本とする」という従来の定説により等閑視されている。

『大正蔵本』の底本について鈴木宗忠「宋版蔵経の基本目録に就いて」は、蔵経書院より京都帝国大学へ寄贈された写本(京大本)であること、『京大本』の底本は明記されていないことを述べた上で、王國維『兩浙古刊本考』、楊守敬『日本訪書誌』により、『京大本』の底本を楊守敬が京都天安寺より購入した思溪蔵に附属する宋刻本と推測、民国二年(1913)趙萬里(1905 - 80)選集『北平図書館善本書目』(巻3、51帖左)に録される「安吉州思溪法宝資福禅寺大蔵経目録二卷宋刻本」に比定している。ただし鈴木氏は北京図書館での原本閲覧が叶わず、この推論は未だに検証されていない。その後、『京大本』の底本と推測される宋刻本について、中村菊之進「磧砂版大蔵経考(一)」は「北京より台北へ更に米国国会図書館に送付せられ、同図書館でマイクロフィルムに収められた後、返却されて現在は(台北)国立中央図書館に典藏されている」とその動向を伝え、阿部隆一『増訂 中国訪書誌』は、楊守敬により購入された天安寺旧蔵の宋刻本『後思溪録』が台北国立故宮博物院の現蔵(故宮本)であり、「卷首七折補写。(中略)下巻は首三半折を欠き、後半は補写」と補写部分を含むことを記している。

以上の先行研究を概観することにより、『大正蔵本』の底本が『京大本』であり、その祖本と推測される天安寺旧蔵の南宋刊本が台北国立故宮博物院に現存していること、その『故宮本』は補写部分を含むことが判明する。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、目録と現存状況の乖離の原因を究明し、思溪版大蔵経刊行の実態を実証的に解明することである。

具体的には、現在まで後思溪蔵を考察する上で基礎資料として用いられながらも、書誌情報の不明であった『大正蔵本』とは如何なる資料であるのかを明らかにする為に、『大正蔵本』の祖本を天安寺旧蔵の南宋刊本(『故宮本』)とする鈴木説を検討する。また鈴木説が正しく、『大正蔵本』の祖本が『故宮本』であるならば、その補写部分の範囲を確認し、その補写部分が本来の南宋刊本の情報を正しく伝達しているのか否か、補写部分は何によるものなのかを明らかにする。さらに、『故宮本』と本来一具であった中国国家図書館蔵(京都天安寺旧蔵)思溪版大蔵經の原本調査を実施し、目録と現存状況の両観点より、思溪版大蔵經刊行の実態を実証的に解明する。

### 3. 研究の方法

本研究は思溪版大蔵經刊行の実態を実証的に解明するために、目録の書誌学的研究、遺例の原本調査、を行う。

#### 目録の書誌学的研究

『大正蔵本』の祖本を天安寺旧蔵の南宋刊本(『故宮本』)とする鈴木説の検討の為、実際に『故宮本』と『大正蔵本』の本文を比較する。それに先立ち、『故宮本』と『大正蔵本』の底本である『京大本』の原本調査を行う。

#### 遺例の原本調査

『故宮本』と一具であり天安寺法金剛院(京都)旧蔵であった中国国家図書館蔵の思溪版大蔵經の原本調査を実施し、追加分 51 函 24 部 450 巻が現存するか否かを確認する。

### 4. 研究成果

先行する思溪版大蔵經研究を回顧し、現在の通説に到る過程を検証することで、思溪版研究の課題を明らかにした。また、『京大本』の原本調査を実施し、捨銭記「因道政捨」の転写より、その祖本が資福禅寺期の補刻を経て印刷された南宋刊本によったものであることを明らかにした。その上で『京大本』が、『故宮本』の転写本であるのか、或いは、『故宮本』と同一の版木で摺られた他本を転写したものを検証する為に、『故宮本』に特有の記述と考えられる補筆箇所(訂正・經典の追加・注記)に注目し、それらが遺漏なく反映されていることから、『大正蔵本』の底本である『京大本』の祖本が『故宮本』であることを明らかにした。

『故宮本』は首尾完存する南宋刊本でなく、首尾の欠損部分を補筆している。注目すべきは、従来、後思溪蔵の特色とされる追離分 51 函 24 部 450 巻の記載箇所が、南宋刊刻部分ではなく補写部分に属していることである。「何故、現存しているのは後思溪蔵であるのに、その目録である『後思溪録』にみられる増補經典 51 函 24 部 450 巻を具備するものが皆無なのか」という設問を考察する上で、補写部分が何によって書写されたのか、その底本が問題の核心である。仮に補写部分が『後思溪録』(刊本)より書写したものであるならば、それは(誤写等を含むにせよ)『後思溪録』(刊本)の内容を反映するものであり、故宮本の内容も一連の『後思溪録』(刊本)として利用が可能である。一方、補写部分が『後思溪録』以外の目録より書写したものであるならば、『後思溪録』(刊本)は刊刻部分のみとなり、利用に際しては刊刻部分、補写部分を弁別する必要が生ずる。果たして、故宮本(補写部)は南宋刊本『後思溪録』の内容を正しく伝えているのか否か。それは故宮本(補写部)と南宋刊本『後思溪録』を比較すれば即座に判明するが、南宋刊本『後思溪録』の完本は現存しておらず、両者の比較は叶わない。そこで検証方法として、故宮本の補写部分と刊刻部分を比較し、両者の表記方法の異同に着目した。「故宮本(補写部)は南宋刊本『後思溪録』の内容を正しく伝えているのか否か」、それはつまり「補写部分と刊刻部分が一連の目録か否か」という問いと同義である。仮に故宮本の補写部分・刊刻部分が一連の『後思溪録』であるならば、両者の表記方法は一致する筈である。また補写部分が『後思溪録』以外の目録より書写したものであるならば、補写部分・刊刻部分は本来異なる目録であり、両者の表記方法に何らかの相違が生じることが予想される。比較の結果、表記方法(「經典卷数 一卷」「餘次在 字函」「經同函」の記入の有無)に異なりが認められた。これにより、補写部分が刊刻部分と異なる性格を有していることは明白であり、補写部分は『後思溪録』以外の目録を底本として書写されたことが判明する。

それではその目録とは何か。『後思溪録』が『天海版目録』に基づき増補された可能性の高いことを指摘する李富華・何梅の所説は、「『天海版目録』(慶安元年 1648 成立)は『後思溪録』(南宋成立)を底本とする」という従来の定説により等閑視されてきた。しかし、実際に追離分 51 函 24 部 450 巻は、南宋刊刻部分ではなく補写部分に該当し、その補写時期が天安寺法金剛院における元録九年(1696)の修補時であるならば、慶安元年(1648)成立の『天海版目録』を底

本として書写することも可能であり、李富華・何梅の指摘は検討に値する所説となる。そこで、上述の刊刻部分と異なりが認められた補写部分に特徴的な表記方法に対して『天海版目録』と照合を行った。その結果、補写部分に認められた表記方法の特色は何れも『天海版目録』と合致するものであり、故宮本の補写部分が『天海版目録』によるものであることが確認される。

この研究成果は思溪蔵のみならず、天海蔵の研究にも影響を及ぼすものである。従来、増補経典 51 函 24 部 450 巻の一致より、天海蔵の底本は後思溪蔵との理解がなされてきたが、これは時系列の錯誤であり、実際には『天海版目録』により『後思溪録』が補写されたのである。その為、天海蔵所収の 51 函 24 部 450 巻の底本については後思溪蔵ではなく、それ以外の蔵経を想定し検討する必要がある。

なお、遺例の原本調査については、新型コロナウイルス感染症の流行により、十分な調査を実施することができなかった。この点は今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 上杉智英	4. 巻 第11号
2. 論文標題 書評：前島信也『敬西房信瑞の研究 - 鎌倉浄土教典籍論 - 』（法蔵館、2021）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『いとくら』	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上杉智英	4. 巻 -
2. 論文標題 岩屋寺蔵思溪版大蔵経の紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宋版思溪蔵復刻本完成祝賀会記念 宋版思溪蔵を現代に蘇らせて	6. 最初と最後の頁 26-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 上杉智英	4. 巻 第67巻第2号
2. 論文標題 岩屋寺蔵思溪版大蔵経の来歴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 171 - 177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上杉	4. 巻 第66巻第2号
2. 論文標題 大正蔵本『後思溪録』の祖本とその問題点	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 84-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 上杉智英	4. 巻 第65巻第1号
2. 論文標題 思溪版大蔵經研究の回顧と課題	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 170-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 上杉智英
2. 発表標題 浄土宗大本山増上寺所蔵元版大蔵經、画像公開の意義
3. 学会等名 令和二年度浄土宗総合研究所公開講座「浄土宗基本典籍の電子テキスト化プロジェクト 仏教の智慧を開く」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上杉智英
2. 発表標題 岩屋寺蔵思溪版大蔵經紹介
3. 学会等名 《思溪藏》研究国際研討會(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上杉智英
2. 発表標題 岩屋寺蔵思溪版大蔵經の来歴
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上杉智英
2. 発表標題 浄土宗大本山増上寺所蔵宋版大蔵經について
3. 学会等名 仏教の智慧を開く - 浄土宗大本山増上寺所蔵宋版大蔵經デジタルアーカイブ化 - (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上杉智英
2. 発表標題 大正蔵本『安吉州思溪法宝資福禅寺大蔵經目錄』の底本とその問題点
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第68回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上杉智英
2. 発表標題 思溪版大蔵經研究の回顧と課題
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第67回学術大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------